37. むしろうち

かつて味舌はムシロ（筵）の産地として知られており農閑期の副業だった。むしろ機は 2 人用から足踏み式の 1 人用への技術改革があり、2 人機では子供も手伝った。

◆むしろ機（ばた）

〈A〉は 2 人操作のむしろ機の筬。縦糸にあたる細縄を通す穴が手前と奥と交互に開いているところがミソ。横糸にあたる藁を通してこの筬で打ち締め、把手を上げれば手前の穴の縄は手前に出てわらを通す隙間ができ、把手を下げると奥の穴の縄が手前に出る。

〈B〉は浮世絵師の菱川師宣の描いた「和国諸職絵尽」（1685）で、民具の 2 人操作のむしろ機と同じ構造である。この構造は室町時代以来基本的に変わっていない。

〈C〉は足踏み式むしろ機で、いすに座って足で踏んだ。1 人で織れるようになった。

〈D〉は足踏み式むしろ機の筬。

◆むしろは打つもの

ムシロをウツ、ムシロウチは古い言葉。国語辞典にはむしろ打ちを「筵を編むこと」と言い換えているが、ムシロは編むとは言わない。俵は編むものだがむしろは織るもので、むしろ機も構造的に織機である。筬で打ち締めるからウツというのであろう。

◆子供も手伝った 2 人機時代

明治 41 年生まれの K さんは、小学校上がる頃からムシロウチを手伝った。ワラをカッて（打って）ヤラコウ（柔らかく）して筵用の縄をナッた（綯った）。むしろ機のヒ（杼）を通すのを手伝った。ものを包むやつ（梱包用）で薄うに打った。20 枚打って 5 枚ずつくくり茨木の市場に出した。20 枚で 80 銭。それが 60 銭に下がったこともあった（三島）。

◆1 日 20 枚の猛者も

足踏み式の時代、薄手で梱包用の「味舌筵」は大阪市場の基準となった。朝 5 時頃からシャンシャンとムシロバタの音がする。ヤー（矢＝杼）が走る。普通の人で 1 日 10 枚、早い人は朝 4 時～夜 9 時までに 20 枚。藁仕事は目を傷めトラホームが多かった（三島）。正月前から田植えまでと 8～10 月。この間暇があったら筵打ちをした（千里丘）。

◆筵屋・筵機メーカーも農家から

むしろ織りは戦後ブームとなる。筵屋の T 氏は農家の兼業、近所に買い付けに回った。TK 氏や K 氏はもっぱらむしろ機製作。むしろ機は遠くからも買いにきた（三島）。

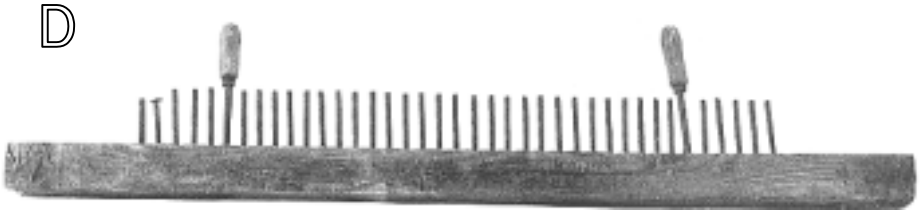
◆豊島むしろ

〈E〉は「七一番職人歌合」。てしまふくろ（豊島筵）は戦国時代のブランド品。

A

B

C

E

D